

9. 京都分類の胃癌リスクを考慮した内視鏡所見スコアの検者間一致度に関する検討 (Interobserver agreement for endoscopic findings score in consideration of stomach cancer risk of Kyoto classification)

越谷病院 消化器内科

行徳芳則, 片山裕視, 正岡梨音, 藤本 洋, 大浦亮祐, 徳富治彦, 林 和憲, 金子真由子, 大川 修, 北川智之, 玉野正也

【目的】胃炎の京都分類は, 客観的かつ簡便に診断できる胃炎所見を取り上げ, その典型像を呈示しかつ胃癌のリスクを評価することを目的に作成されたが, 実臨床における評価はまだ不十分である. 今回我々は京都分類の H.pylori 感染診断正診率, 胃癌リスクを考慮した内視鏡所見スコアの検者間一致率に関して検討した.

【方法】2015年4月から9月の間に上部消化管内視鏡検査施行した症例で, ウレアーゼテスト・呼気テスト・血清抗体価によって H.pylori 感染状態が既知の現感染症例 30 例, 既感染症例 30 例, 未感染症例 30 例をランダムに入れ替えブラインドで内視鏡写真を評価した. 検者は内視鏡経験 10 年以上のスタッフ A・B と今年から内視鏡を始めた専修医 C・D である. 評価項目は 1. H.pylori 感染診断正診率の検討 2. 胃癌リスクを考慮した内視鏡所見スコアの検者間一致率の検討 3. 早期胃癌に対する ESD 施行前の患者と非癌の慢性胃炎患者それぞれ 30 名の胃癌リスクスコアに関して, 正診率・一致率の高い検者 2 名の評価を検討した.

【結果】感染診断の正診率は, A 65.6% B 65.6% C 57.8% D 47.8% であった. いずれも既感染の診断率が低いために全体の正診率を下げていた. 胃癌リスクを考慮した内視鏡所見スコアの検者間一致率は AB のスタッフ間で重み付け kappa 係数は 0.90 であった. スタッフと, 最も正診率の低い専修医 D との一致率も 0.80 と非常に高かった. 今回の検討において感染診断の正診率が高く一致率の高かった検者 AB がそれぞれ評価した, 胃癌・非癌慢性胃炎患者間のリスクスコアに有意差は認められなかった.

【結論】今回の検討において, H.pylori 感染診断は既感染症例の正診率が低かった. 胃癌リスクを考慮した内視鏡所見スコアの検者間一致率はスタッフ間・スタッフ専修医間でも非常に高かった. 胃癌・非癌慢性胃炎患者間のリスクスコアに有意差は認められなかった.

10. 人間ドックにおける MRCP 検診 (第一報)

¹⁾ 獨協医科大学健康管理科

²⁾ 獨協医科大学消化器内科

³⁾ 獨協医科大学臨床研修センター

知花洋子¹⁾, 大谷津まり子²⁾, 渡邊菜穂美¹⁾, 倉井英卓³⁾, 岩崎茉莉²⁾, 水口貴仁²⁾, 陣内秀仁²⁾, 村岡信二²⁾, 土田幸平²⁾, 小池健郎²⁾, 富永圭一²⁾, 笹井貴子²⁾, 大類方巳¹⁾, 平石秀幸²⁾

【目的】本邦では膵癌の罹患率は増加しているが, 進行癌で発見される例が多く, 検診での早期発見は困難である. 膵癌の早期診断を目的に, 人間ドックのオプション検査として 2015 年 10 月より MRCP 検査を加えたため, 腹部超音波検査 (Ultrasonography : US) との診断と併せて検討した.

【対象】2015 年 10 月から 2016 年 9 月のドック受診者で US を行った 765 症例と, このうち MRCP を行った 84 症例を対象とした.

【方法】US では, 膵臓の描出可能部位の検討を行い, 膵管は 2.5 mm 以上を所見ありとした. MRCP では膵臓, 胆管の所見を検討した. MRCP で膵管内乳頭粘液性腫瘍 (Intraductal Papillary Mucinous Neoplasm : IPMN) が指摘された症例と, 膵, 胆管に所見を認めない症例の臨床血液学的諸検査との比較検討を行った.

【結果・結語】US では 643 症例 (84.1%) が膵頭部, 体部の描出が可能であり, 有所見は膵管拡張が 5 例 (0.78%), 膵嚢胞が 3 例 (0.47%) であった. MRCP では IPMN を 18 症例 (21.4%) に認め, MRCP は US と比較して膵嚢胞性病変の検出率が非常に高かった. IPMN は単変量解析結果では, 高齢, 男性, 空腹時血糖高値の症例に多かった. 血液腫瘍マーカーは有意差を認めなかった. 多変量解析では年齢 (Odds 比 1.063, 95% CI 1.012-1.134, P=0.0336) と有意な関係を認めた. MRCP 検診を積極的に行うことで, 無症状の膵病変が発見され, 膵癌死亡率の低下に寄与できる可能性がある.